

南のシナリオ大賞

「はるしぐれ」

作・伊吹一

（あらすじ）

東京駅を出発し、博多駅に向かう深夜バスの車内。女は、隣に座っている男が3年前同棲していた男であることに気づいていた。しかし、男の方はそのことに気づいていない。男は、女と同棲していた3年前に精神疾患が原因で、記憶喪失になったからだった。

男は女に借りた充電器を返す。女は男に何の曲を聴いていたのか尋ねる。男は雨の音を聴いていた。医師に勧められて聴いているとのこと。男のイヤホンで雨の音を聴く二人。

サービスエリアに着く。女は男が好きだった自販機で売っている焼きおにぎりを買い、二人で食べた。男は、ある女性とサービスエリアで焼きおにぎりを食べたことを思い出し、その話を女にする。女は、それまで病気に気づけなかった自分を責めていたが、男が自分を恨んでいないことを知る。ただ、男が女を思い出すことはなかった。

雨が降る。男に雨の名前を聞く女。その雨の名前は、春時雨（はるしぐれ）だった。

〈登場人物〉

男

女

バス運転手

バスの走る音。

運転手アナウンス「(小声で) 本日は深夜バ

ス、スプリングドリームをご利用くださり

ありがとうございます。まもなく三木サー

ビスエリアに到着致します。休憩時間は二

十分程度を予定しております。この休憩が

福岡・博多までの最後の休憩となります。

お手洗い等、この休憩にて済ませていただ

きますよう、よろしくお願いいたします」

男「……あの」

女「はい？」

男「あの、ありがとうございます」

女「もういいんですか？」

男「はい。フルで充電できたんで。ホントあり

がとうございます」

女「いえ。良かったです」

男「ホントすいません(呟くように) 絶対バ

ッグに入れたただけだな……」

女「……ありますよね。そういうこと」

男「え？」

女「なくさないようにしよう、大切にしよう」と

思ったものほど、どこかに行ってしまうよ

なあという」

男「それ、充電器の話ですか？」

女「どうでしょう。……あ、あのさつきから気

になつてたんですけど」

男「はい」

女「音楽、何聴いてたんですか？」

男「あつ。これ音楽じゃなくて、雨の音を聴い

てて」

女「(驚いて) 雨？」

男「変ですか？」

女「あ、いや……普通は晴れとかの方が皆好き

だと思つて。すみません……」

男「僕、軽い持病を持つているんですけど、通

っている病院の先生の勧めで」

女「雨の音を？」

男「その先生が言うには、雨の音には人を癒や

す力があるらしくて」

女「人を癒す力……」

男「聞いてみますか？」

女「いいんですか？」

男「もちろん。アプリで聞いてたんですけど……

……あ、ごめんなさい。イヤホン汚いですよね

僕のだと」

女「あ、いや、全然」

男「すみません。じゃあ片方ずつ……。僕こつ

ちつけるので」

女「ありがとうございます」

雨の降る音。

男「これが梅雨の雨で」

大雨の降る音。時々、雷の音も交じる

男「これが夏の夕立ち」

て……」

雨音が小さくなる。

男「これは秋雨です」

女「ごめんなさい」
男「いや、全然いいんですけど……」
女「ごめんなさい。どうしても気になって」
男「（少し笑い）でも分かります。隣りに座ってる人がイヤホンで何聴いてるのか、

ドアの開く音。人が降りていく。

雨音が消える。

気になる感覚。電車の中とかでもありません。

男「んっんー」。ふうー（呟くように）空

女「こんなに種類あるんですね、雨にも」

笑つてたりすると、あ、同じ深夜ラジオ聴いてるのかな、とか勝手に思ったりして」

女「買ってきちゃいました」

男「この前調べたんですけど、日本には雨を表す言葉が四百個以上あるらしいです」

男「ね。……あ、ところでお名前」

ね」

女「四百も？」

女「あの。なんで博多に？」

女「はい」

男「はい。四百」

男「え、あ……なんか行きたくなって。えっと

男「僕、これ大好きなんです」

女「凄い……」

……そちらは？」

女「うん、そう思っ」

男「なんで分からないんですけれど、雨の音を聴くと、たしかに落ち着くんです。だからい

女「……おんなじ感じですよ」

女「あいや、そうかなあって思っ。……良ければ一つ」

つもはずっと」

バスの止まる音。

女「うん」

男「え、いいんですか？」

男「でもなんでわざわざ何を聴いてるかなん

運転手アナウンス「パーキングエリアに到着

女「一人じゃ食べ切れないので」

男「ありがとうございます。いただきます……」

アツツ！！」

女「アハハ（と、笑い声）」

男「めっちゃ熱いですからね」

女「ホントですか？……アツツ！！」

男「ほら！」

女「熱すぎませんか？ これ」

男「なんでなんですかね。サービスエリアの焼

きおにぎりって絶対に激アツなんですよ

ね」

女「分かります」

男「なんかちよつとムキになってる感じすら

します」

女「焼きおにぎりか？」

男「焼きおにぎりもだし……業者が？」

女「どういう話ですか」

男「（食べて）うん。でも、美味しいです。美味

しい」

女「良かった」

男「……あ」

女「どうかしました？」

男「デジャブ」

女「デジャブ？」

男「ここは分らないんですけど、サービス

エリアで昔、女性と焼きおにぎり、食べた気

がします。で、そのとき、その人も今みたい

に『良かった』って」

女「……へえ」

男「僕、実は三年前に記憶喪失になってしまっ

て。それがさっき言ってた持病なんですけ

ど……。なので、厳密に言うとは断片的に記憶

が蘇ってるだけの可能性もあるので、デジ

ャブじゃないかもですけど……」

女「……そうなんだ」

男「はい」

女「もう全部覚えてないんですよね」

男「はい。ほとんどのことは」

女「そっか……」

男「でも、なんとなく今みたいに断片で思い出

せたり、あ、あと面白いのがあって。少しだ

け話しても？」

女「もちろん」

男「感情だけ覚えているんです、感情の感覚だ

け」

女「それは記憶ではなく」

男「はい。理屈というか、なにがどうなつてた

とか、そういうのは覚えていないんです

けど。感覚だけは懐かしくなるというか」

女「へえ……」

男「どうやら僕はその時期、誰かと一緒に同棲

していたらしくて」

女「……はい」

男「その人との思い出にアクセスしたとき、胸

がギュッてなるんです」

女「……それは、嫌なことなんですか？」

男「真逆です。とっても嬉しいことです。休日

の朝の珈琲の香りとか、映画館のポップコ

ーンとか、夕暮れにできる長い影とか。そういうのを見ると、その人としたときの感情だけを思い出すんです」

女「そうなんだ……」

男「で、今のもそれでした」

女「焼きおにぎり？」

男「はい。サービスイリアの焼きおにぎり」

女「そっか……」

男「ありがとうございます」

女「いえ」

男「うん、やっぱり美味しい……」

女「……でもその女の人は、あなたの心の病気に気づけなかったんですね」

男「え？」

女「その人を責めたりする気持ちは……ないんですか？」

男「責めるなんて……考えたこともなかった

です」

女「でも、その人がもっと早く気づいてあげら

れれば」

男「ううん。それは違います」

女「えっ」

男「確かに、僕はその時期に、自分では受け止めきれないほどの何かがあったんだと思います。それは事実だと思います。だけど、今みたいにその人との思い出だけは今もこうして思い出すじゃないですか。それって、あまりにも幸せだった記憶を忘れられないからなんだろうなと思っていて」

女「……」

男「だから僕、愛がなにか分かるんです」

女「愛？」

男「僕の記憶の中には、誰かと愛し合った記憶はないんですけど、その人といった感覚は、それが愛だったんだなって思えるんです。だから責めるだなんてもう……」

女「……でも」

男「きつと意地だったんだと思います。彼女に

最後まで心配掛けさせたくない。彼女という時間だけは、最後まで幸せでいたいって。だから、彼女が気づかなかったんじゃない。僕が気づかせなかったんです」

女「……」

男「すみません。長々語ってしまつて」

女「いえ」

男「ありがとうございます」

女「いえ……」

男「あ、運転手さん手振ってますよ。行きましよう」

女「はい」

ポツポツと雨の音がしてくる。

次第に雨音が大きくなる。

女「あ……」

男「雨……」

女「あの」

男「はい」

女「……この雨は何ていうんですか？」

男「春に降るにわか雨……なので。春時雨です」

女「春時雨……」

雨音が小さくなっていく。

ドアの閉まる音。

運転手アナウンス「（小声で）それでは博多まで、休憩なしで向かって参ります。途中、体調等を崩された方は遠慮なく運転手までお申し付け下さい……。それでは出発いたします」

バスの走る音。

男「あ、知ってますか？博多ってとんこつラー

メンのイメージあるんですけど、本当は地

元の人にはうどんの方が人気らしいです

よ」

女「……うどん」

男「なので、博多着いたらうどん食べるといいと思います。きつと通だなんて博多の人に

思ってもらえます」

女「……食べてみます」

男「……ごめんなさい。うどん、お嫌いでした？」

女「いえ、そんなことは……私の、大好きな人がうどん、好きだったので」

男「そっか……。じゃあいい人ですね、その人」

女「え？」

男「僕もうどん、大好きなので」

女「……うん」

男「そろそろ、寝ますか？」

女「寝ましようか」

男「……おやすみなさい」

女「……おやすみなさい」

雨の音。

しばらくして、雨音が消える。

終わり